

文字を数ふる法師

田 島 毓 堂

0. はじめに

標題の言葉は「他の宝を数へて半銭の分無し」と続きます。道元禅師の言葉であります。

私は、徹頭徹尾言葉の学徒であります。私は、道元禅師の流れを汲む者ではありますが決して、道元禅師からは相手にされない人間であろうと思えます¹⁾。

私の学部卒業当時、一種の道元ブームでした。そんなこともあり、正法眼蔵を卒業論文のテーマに選びました。道元禅師真筆本を対象にし、写真焼き付けを自分でやり、それを元に、事もあろうに道元禅師の文字を一つ一つ数えたのでした。卒業論文、修士論文は道元禅師と懐奘禅師の文字を数えることから始めたのです。文字法師の悲しさ、当時から、今に至るまで、中々正法眼蔵の真意に迫ることは出来ていません。ただ、それは私の精一杯の生き方であります。正法眼蔵の言葉の中で異彩を放つ漢語サ変動詞、この数も勘定し、随分長いこと掛かりましたが、先年漸く全部用例を掲げ、今分析に掛かっています。昭和40年にこの作業を初め、源氏物語のサ変動詞と比較してから、40数年経っています。何とか、これだけは完成したいと願っています。正法眼蔵の研究を放置しているのではありませんが、気にはかかりながら、他のことに手を出し、中々捗りません。サンデー毎日になる今年からは、計画をきちんと立てて牛歩を進めたいと思っています。

皆様方に、私の来し方をふり返って申し上げるなどと言うのは、おおけない事だと思っておりますが、先年、業績公開のために自分の過去の仕事をふり返ってみる機会を与えられました。その時

感じたことも交えて、お許しを得て、文字法師のしてきたことを申し上げさせていただきたいと存じます。

1. 索引など

私は、国文学の研究室に在籍しておりましたが、卒業論文としては、「正法眼蔵の国語学的考察」という論文を書きました。その時まさに道元禅師がどういう文字を使ったかという事を数えました。それは、修士論文にも続きました。学位論文では、その索引作りが基礎になりました。いつでも言葉を数えていました。正法眼蔵に限りません。色々な作品の索引作りに励みました。昭和40年代に大久保道舟先生の『道元禅師全集』の索引の作成をさせていただいたのは、大変な仕事ではありましたが、同時に随分得るところの多い仕事であったと感謝いたしております。今でこそ、各種索引が夥しくありますが、当時まだまだ諸種の作品の索引が少なかった時代で、自分で10,000頁分くらいは作ろうと思っていました。具体的に考えたわけではなく、沢山というほどのことです。索引など学問の業績にならないというような陰口の中で一生懸命励みました。業績になろうが成るまいが、そんなことはどうでも良いことでした。最初に勤めた東海学園女子短期大学から名古屋大学に転任するときに索引作成のために取り、未だ整理せずにあつたカードを捨ててしまい、残念に思ったことでした。また、先年も、名古屋大学文学部の耐震改修工事の折りにも大量のカードを心引かれながらも捨ててしまいましたが、今や、カードの時代ではありません。もっとも、手書きでなければならないようなものがない

わけではありませんが。老後にゆっくりそれで更に索引作りをしようと思っていたのが、それできっぱりやめにすることが出来ました。ただ、一つだけ、今でも気になっているのは、法然上人絵伝(四十八巻伝=勅修絵伝)詞書きの索引であります。この、小手調べにといってお出版してくれたのが、『正法眼蔵随聞記語彙総索引』でしたが、法蔵館という出版社もあまりの手に懲りたのでしょうか、法然上人絵伝のことはその後何とも言うてくれません。もう少し暇が出来たら何とかしたいと今でも思っております。これも、文字を数ふる法師の性なのでしょう。

2. コンピュータとの出会い・古辞書研究との 思わぬ決別

1984年のコンピュータとの出会いが、私の数え性に決定的影響を与えました。それまでも私は語彙研究には並々ならぬ興味と情熱を持っておりました。しかし、遅々とした歩みでした。遅々としてはいましたが、多くの経験を経て、茫漠たる底知れぬ語彙という存在に大きな、そして多大の興味を抱いていました。しかし、それは、一方で若い頃から抱いていた言葉に関する多くの他の関心を一時停止することでもありました。

こういう事もありました。当時当地の研究者グループで『類聚名義抄』の注釈的研究を進めておりましたが、そのレジュメのようなものを公刊しようとしていたときに、思わぬ横やりが入り、急速にその関心は薄れました。今でも、古辞書には大いに興味と関心を持っています。しかし、他から見れば、一つとして古辞書に関して論文も書いていない私にそんな興味があるなどと思われないのも無理からぬ事です。ただ、古辞書・名義抄に興味があるといっても、いわゆる現在までの古辞書研究の世界に見られるようなああいふ論文を書くことではありません。ああいふ古辞書の周りをぐるぐる回っているような論文には興味はあまりありません。古辞書の記述内容そのものに興味があるのであります。そんなことはなかなか今の学会では、相手にされません。そういうなかなか論文に成らないようなことは学生は手が出

しにくいと思います。これから就職しようとする人には確かに無理かも知れませんが、大家と言われる人には期待したいと思います。こんな状況になっているのは、今の古辞書研究のようなものしか認めない学会のあり方がおかしいのだと思います。それは私が関心を持っていた訓点語研究の世界でも同じ事を感じます。どういうことかといえば、訓点や語法や特殊な語に興味は持って、一向、そこに書いてあること、その内容には興味をお持ちにならないような様子なのです。「内容は分かりませんが…」などと、平気なのです。これでいいとは私には思えません。いやしくも、言葉の学徒のすることです。何が書いてあるのか、言葉の表面上だけでも分からなくてはならないと、私は思います。

古辞書の内容に関心を持ったのは、国文学の注釈書のあり方に関してでありました。これこれの語が名義抄にあるとか、和名抄にある、式の物をよく見ます。これで注釈になるのでしょうか。そうあっても、それが何を意味しているのかが分からなければ、仕方ないのではないのでしょうか。その語があること自体は大切にしたいとは思いますが、それだけでは、半分です。その意味するところが知りたいと思ったのです。ただ、若い方々はこんな事にとりつかれたら、論文も書けません。やめておいたほうが無難です。

それはともかく、他からの横やりで(これはこれで理不尽極まることで、何故そういう横やりが入れられたのか、真相を知りたいと思いますが)、泥沼にはまるところを助けて貰ったと思って感謝しております。こういう、やりたいけれども、やりだしたら大変なことになるのを止めさせてくれた方にも感謝せねば成りません。こういうことは、他にもありました。詳しく言えばこれで大半の時間をとってしまいそうですが、極くかいつまんで申し上げておきます。

3. 法華経為字和訓の研究と法華経訓読一点流出

宮内庁書陵部蔵の法華経平安後期の訓点についてです。昭和54年に見せて貰ったときは、手続

きも簡単でした。所々に白点があり、朱点も少数混じっていました。また所々に白いぼつぼつが固まっていたのが気になりました。

それから10年以上たって、確か平成二年のことでしたが、また機会を得て見せていただくことができました。このときは、貴重書として特別の許可が要り、然も、一卷ずつしか見せて貰えませんでした。薄暗い閲覧室でよく見ていると、窓からの光と蛍光灯の光の混じり合うところに例の白い粉のはがれた後のはっきり浮かび上がって見えました。手で、蛍光灯の光を微妙に遮ってみると、全体にその跡が見えます。こんな事をしてみていると、書陵部の司書官が一体何をしているのだと聞きに来ます。これこれこういう訳ですと説明をすると、自分でもやってみて、「なーるほど」と納得、今まで全く気が付かなかったと言います。

しかし、これは、天気の良い日に限ったことで、曇った日には全く見えません。どうやっても見えませんでした。一週間毎日通い詰めてみましたが、第一巻を全部見ることもできませんでした。色々知恵を貸して下さる方があり、赤外線写真を撮って貰いました。ただ、写真業者が言うには、冬でないと取れないというので、それまで待つて撮って貰いました。しかし、何も見えませんでした。そもそも、赤外線写真は、何か痕跡があって、それが何かに隠されている場合に見ることは出来る事がありますが、このように、白点、つまり、顔料の胡粉が剥落した跡、つまり何も無い物を見るには適していませんでした。文化財研究所の技官が方法が一つあるけれども、許可はされまいだろうということでしたが、念のため、尋ねてみたところ一言の下に却下されました。当然でしょう。紫外線を当てるというのですから。まあ、自分の目で丹念に見るほか有りませんが、もう視力も相当落ちており、全体を拝見するには、半年以上掛かるだろうと思いました。それで、その道の権威に相談したところ、「止めときなさい、他にやることがあるでしょう」と。これで吹っ切れました。「白点流失」などという短い文を書いたことがあります。実は、今から630年ほど前に、この補修をしたということが書いてあります

が、その折りに、水を使ったために、白点の流れ落ちてしまったというのが真相のようです。いずれ、光学的にこういうものを読みとる技術が開発されることは十分期待できますので、それまで待つことにします。実は、今でも何とか出来ないことはないようですが、大がかりに成りすぎ、とても、許可は出まいということです。偏光写真を撮るという方法が考えられるということです。先年、書陵部の方が、非常勤講師として名古屋大学文学部に出講された時、このことを話したところ、是非又見に来いと言われましたが、視力のことと時間のことを考え、あきらめました。若い、目のいい方が一念発起していただけないかと期待しております。恐らく、法華經訓読の貴重な資料になると思います。平成二年当時も、若い方が、その法華經を拝覽していたということで、成果を期待していましたが、その後何も聞いておりません。

曇りの日には何も見えなかったということは、光の成分に関係有ることとうすうす感じました。ですから、巧く光学的に光の中身を調節することによって、はっきり見えるのではなかろうかと思えます。その進歩に期待いたします。

法華經についても、為字を数えることから始まりました。もっとも、既に先人は数えていましたが、それに導かれ、為文字の和訓の由来が知れたことは、法華經にしたしむ契機にも成りました。この法華經為字和訓を中心とした研究では随分いろいろところで多くの方々のお世話になりました。近世における多くの法華經本文と注釈（科註）の盛行には目を見張るものがありました。しかし、訓点語学会関係者の研究は全くここには及んでいませんし、それを取り上げること自体に否定的なのは何故なのでしょう。庶民生活にまでしみ込んだ法華經の読み方こそ言葉の研究にも反映されるべきだと私は考えます。勿論、古代の片言隻句を大事にすることの大切さはよく理解できます。しかし、言葉は人間の共有財産、多くの人々の間で盛行したこういう科註だとか、兩点本²⁾などの研究も放置していいとは思えません。こういうものを退ける今の学界のあり方には付い

表4 『窓ぎわのトットちゃん』Wc 準意味分類の表

ていけません。こういうところには、研究補助金等も配分されない様子なのに釈然としないものを覚えます。

話が少しそれましたが、私自身の研究として、為字訓についてだけでもまだ十分だとは思っていません。ところが、先年公刊いたしました『法華経為字和訓の研究』で一段落が付いたような気がして、少し遠のいてしまいましたが、私の中では、未だその火は燃えており、いずれ又燃焼しなければと思っております。これから100年生きて(？)、今始めている「頂妙寺版の成立」に確固たる基盤を築いておきたいと思っています。これも正に、一字一字を数えるような作業です。

4. 正法眼蔵のサ変動詞

私は、正法眼蔵の文章を言葉の面から研究することを第一の仕事にしてきました。その割には中々理解が進みませんが、中でも多彩で他に殆ど例を見ないような漢語サ変動詞にはずっと関心を持ち続けてきました。七十五巻本を底本にして研究を進めて参りましたが、その中のサ変動詞はほぼ2,036語有り、延べでは7,212語になります。その一々の用例を掲載してきましたが、昭和40年(1956)の論文を手始めにしてつい先頃平成21年(2009)に終わり、いま分析をしております。最終的には、その意味分野別構造を明らかにし、日本語一般の複合サ変動詞との比較を試みたいと思ひ、一つ一つに単語コード語素コードの付与をしました。これは、比較語彙論的方法の正法眼蔵サ変動詞への適用であり、以後色々な面で、比較語彙論と、私の他の仕事との組み合わせをしたいと思っております³⁾。

5. 比較語彙論のコンセプト

私は90年代中頃に「比較語彙論」のコンセプトを得て具体的構想を提案いたしました。私自身、これによって、自らの確固とした立脚地を得た思いが強くございます。丁度、方言研究を専門になされた、名古屋出身の言語学者柴田武先生が、集中講義に出講された際、最初にしみじみと

述懐されたことを思い出します。先生は、当時、方言研究界で支配的になりつつあった言語地理学という方法により、安心の地を得たと仰有っていました。私は、柴田先生のようにえらい学者ではありませんが、とにかく、それまで語彙論に従事し、関係の論文をいろいろ読んでいましたが、一つとして心に響くものがありませんでした。大変な手間暇が掛かっていることは、自分で語彙調査をしてみれば身にしみて分かります。勿論、その語彙調査も自分から買って出てやっていることですから、手間暇の掛かることを得意げに話すことではありませんが、それを知っているだけに、折角の論文が、ちっとも、その努力の成果を表していないことに、大きな疑念を持っていました。後に、それが何故であるかは、はっきり分かりましたが、初期の私には大きな疑問になるばかり、退却すべきかとも思案しました。

しかし、そういう中でも、以前目にした阪倉篤義氏の「万葉語彙の構造」(『万葉』34号 1960)という論文がいつも気に掛かっていました。この論文には、「その一」と有りましたが、遂に、その二は現れず、「唯一」に成ってしまいました。その実、その論文の中には、直ぐにも、続編が出そうなのが書いてありました(阪倉篤義氏はこの論文執筆当時40歳代前半の研究者として脂の乗りきったときでしたのに、その二が出なかったのは何故か、私は、その論文を子細に見ていて、その理由がほぼ分かりました)。

この論文に続いて、浅見徹氏ほか何人かの方々が、この方法を踏襲されました⁴⁾。私もその方法を語彙分析に利用しようとしたのですが、幾つも超えなければならない問題がありました。それはどういう事か。この点について述べましょう。私が阪倉氏の方法に対してした批判、私の対案、及び、私が提案した比較語彙論に対する批判と、私がそれに対して答えた事について述べ、これまでの比較語彙論の有りようを将来に向かっての展望を述べたいと思います。そして、それに対しても又忌憚のない御批判を御願ひいたしたいと存じます。「批判と対応」については既に公表したこと

もありますので⁵⁾、その点は略述します。

5.1 比較語彙論への批判と対応

5.1.1 阪倉論文に対する批判

まず、私が阪倉氏の論文に対してした批判は、詳しくは、「語彙研究法としての意味分野別構造分析法—阪倉篤義論文の顕彰と批判—」（『国語と国文学』77-6 2000）をご参照いただきたいと存じます。ただお断りいたしておきますが、これは、決して批判のための批判ではなく、語彙論建設のための建言であり、阪倉論文の顕彰のためであったということでもあります。そして、阪倉氏は御自分がされた方法に特に名前を付けていませんが、私はこれに「意味分野別構造分析法 The Strucral Analysis of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories」（略称 SAV）と命名しました。はじめ、これを「意味構造分析法」と称していましたが、湯浅茂雄氏の批判と提案をうけ、今のように改称いたしました。

阪倉氏の論文について、細かく言い出すと多くの問題がありますが、二点だけに絞って申し上げます。

一つは、言語研究に欠かすことの出来ない、ラングとパロールの視点であります。阪倉論文はそれを混同しています。私は、言語のラング的側面を「集団的規範」、パロール的側面を「個別的実現」という用語で表現しております。指すところは、ほぼ同じ様なことではありますが、ソシユールがラングを確固不動の（とは言っていませんが）もののようにいい、ラングを同一言語社会の成員は「同じ辞書を脳中に貯えている」と言った比喩で表していることにどうしても同意できませんので、同じ用語を使うことを差し控えております。ラングが同じであったら、言葉の行き違いも言葉の変化も起こらないはずであります。個々人のラングはそれぞれ微妙に、或いは大きく違っているものだと思います。これについては、かつて同僚であった高山倫明氏のご助言により、上記のような用語を用いたものでありますことを申し添えておきます。

阪倉氏は万葉語彙という個別語彙を扱いながら、実際には、万葉時代のラングを対象にしよう

としたとしか思えない扱いをされます。具体的に言えば、実際に万葉集中に出現していない語でも、万葉集における訓仮名の用法から、存在が推定される語を万葉語彙の中に算入されてしまったのです。これでは混乱いたします。すなわち、「鶴」という文字、「～しつるかも」といった表現の中で、「～鶴鴨」などと使われます。例えば、「山辺の御井をみがてり神風の伊勢処女ども相見あひみ鶴鴨（万葉集81番歌）」とあります。ところが、万葉集の中には「鶴」と言う鳥は読み込まれていますが、決して「つる」とは表現しません。後世の和歌の中でもやはり「つる」とは言わないようです。歌語として「つる」は何かなじまないものがあったのだと思います。何故かは、十分説明できません。物語や随筆には用いられています。つまり「つる」という語は万葉集にはないのですが、しかも、「鶴」という文字を「つる」と読むから万葉集の名詞語彙の中に、「つる」という語を加えるという、方針を立てられたのであります。例示されたのは、この「つる」と、「しらに＝白粉」「かも＝氈」の三語だけですが、実際に、こういう手続きでどれだけの語が算入されたかは分かりません（「胡粉（しらに…白い土）」＝「知らない」の意味で用いられるものです。11-2677「還者胡粉 嘆夜衣大寸（かへりはしらに なげくよぞおほき）」、13-3255「処女等之 心乎胡粉（をとめらが ころろをしらに）」「氈（かも…敷物）」＝助詞の「かも」、7-1415「玉梓能 妹者珠氈（たまづさの いもはたまかも）」、7-1416番歌は1415の或本歌であるが「玉梓之 妹者花可毛」とあります）。

異なり語として扱われたために、問題は顕在化しなかったのですが、延べ語として扱えば使用度数ゼロの語を万葉語彙としてしまっているということでも直ぐに分かったことです。これはどうしても改める必要があります。集団的規範の語彙を扱おうとするのか、個別の実現の語彙を扱おうとするのか、きちんと意識しさえすれば起こらない混乱であります。つまり、万葉時代にその集団的規範としては、そういう語があったことは確かでしょうが、個別の実現としての「万葉集」には無い

語なのであります後の他の方の論文にも、この混乱が見られることが有りますが、意識の問題だと思えます。このことは、きちんと区別しておかなければならない重要な問題です。

もう一点は、調査単位の問題で、これは古くて新しい問題であります。いまだに、万人が納得するような単位に関する定義はありません。特に複合語に問題が集中します。阪倉氏の方法の要点は語彙分析に意味の視点を導入することでした。勿論、未だ素朴な意味分類ですが、いやしくも、意味を分析の視点に据えるならば、個々の語の意味を過不足無く、如実にすくい取る必要があります。そのことを、十分意識して居られたことは、出来る限り分割するという方針を取られたことに現れています。しかし、少しでも分割できない複合語を認めざるを得なかったことは、もう意味をすくい取り損なうことを意味します。それと同時に、分割される語とされない語（たとい少数であっても）が有るということは、語を計量する立場では、単位として不均衡を生じます。この点について、私は、「意味単位」と称する単位を導入して、分析したりしましたが、最終的に、語彙分析のために、「単語コード」「語素コード」の二本立てにすること、そしてその使い方など、かなり、語彙分析のための単位のことには心を砕いてきましたが、この点については、今回は、これに留めます⁶⁾。

猶、単語の単位についても、言葉の根本に立ち返り、発音を基にして、割合簡単で然も間違いの少ない、文節に基づいた私なりの定義を作っております。もっとも、「文節」にも若干の批判がありますが、音声言語に基づき、言葉の生理に基づいているだけに普遍性があり、調査単位の基礎として誤りが少なく、容易に認定できる長所から、これに依るのが、適切だと考えております。日本語以外にも汎用性があるようです。

5.1.2 多義語の扱い

その他の問題として、多義語の問題は大切です。私に対する批判でもありますので、私への批判に対する答えとして申し上げます。

阪倉氏は、語の多義の問題について、いわゆる

中心的意義とか周辺の意義というようなことを持ち出されていますが、それでは決して片づきません。私に対する批判として、「文脈的意味」をどうするのだということがありました。つまり、語の意味といっても、使われる場所で違うのだから、どの意味にコードを付けるのかという質問で、同時に、その批判は、コード付けなどは不可能に近いというニュアンスでした。

いかにも難問のように思えます。そして、事実今までどなたも解決してはいなかったのです。しかし、考えてみれば、実際に言葉を発したり文章を書いたりするときには、余程のことがない限りは、その場では、その語は一義的です。もしそうではなくて、こういう意味でもあり、ああいう意味でもあるということになれば、和歌や詩に見られる掛詞、或いは駄洒落・地口といった意味を取ることより、言葉を楽しむような場合を除いては、意志をきちんと通じることができません。

原則的に、実際に使われるときは一語一義です。逆に、わざわざ二義を掛けているような掛詞は、表の意義だけを採用するというような阪倉氏の方針は良くないことになります。作者が込めた意味は汲み取らなければ成りません。

これも、集团的規範としての語彙を考えるか、個別の実現としての語彙を考えるかに掛かっています。実際に使われるときは、多義中の一義を用います。従って、パロールの場合原則一義であり、多義語ということは、ラングとしての語彙を考えるときに発生する問題だということです。疑似ラングとしての辞書には理想的には、限度はありましようが、使われる限りの意味を書いておくべきでしょう。その時、ある一語に対して、多義であることが問題になるわけです。コード付けの問題として言うならば、個別語彙にコード付けをする場合は、当然文脈における意味を対象にすべきです。そうは言っても、ある程度の限定とかまとめをする必要はあると思います。集团的規範語に対しては、その持つ意味全部にコード付けする必要があります。それをどのようにするかは、技術的問題で、「多義語をどうする」というような、解決不能に見えるような問題ではなかったのだ

す。以前、色々の方が悩んだ問題も、このように考えればすっきり致します。

5.1.3 比較語彙論に対する批判

5.1.3.1 比較語彙論は新しい分野

比較語彙論は新しい研究方法による新しい学問分野であります。

比較語彙論の目的は次のようなものです。ある言語はその文化によって育てられ、一方、その文化は、その言語によって育まれます。文化は、言語に反映します。文法や音韻にそれが反映しないとは言えませんが、それはまことに微妙です。それに対して、語彙は、文化・生活との接触面でありますだけに、その反映は直接的です。その語彙に反映した文化を知ろうとするものです。ある文化を育てた言語の語彙と、例えば、日本語の語彙とを比較することにより、その共通点と相違点を知り、更に、その原因を追究しようとするものであります。なかなか、大変ではあります。語彙の比較を通じて、文化の根底まで深く理解しようとするもので、異文化理解ということを目的に据えたものであります。

このキーコンセプトは、阪倉篤義氏の「万葉語彙の構造」の第一節、『分類語彙表』前書きに言及されております。

順序は阪倉篤義さんのあとになりますが、『分類語彙表』の「まえがき」には四つの役割が掲げられています。第一が類義語辞典、表現・詞藻辞典としての役割、第二に類似語形を知る手がかりとしての役割、第三にある言語体系・言語作品について表現上の特色をみる物指しとしての役割、第四に基本語彙設定の基礎データとしての役割です。第三の役割の中に、「このような意味の一覧表に語彙を当てはめてみると表現の過不足や用語の特徴的な集まりが明らかになるであろう。そしてもし分類が十分妥当であるならば、**異なった作品の間とか、異なった言語体系の間とかの語彙対照の物指しとなり、一方では、それぞれの言語社会の精神構造や生活構造を解く基本的手段ともなるであろう。**族制語彙とか、色彩語彙とかいう、一部のまとまった項目についての研究もあるが、それを語彙の全領域に及ぼして考えるのである。」

と書かれています。『分類語彙表』では、第四の役割が主要な関心事とされていますが、今、引用した部分には、すでに、比較語彙論の基本的なコンセプトが示されております。

このことは、阪倉篤義氏「万葉語彙の構造」の中で、『分類語彙表』の前身である林大氏の分類案を「日本語の意義分類のうち、科学的なものとしてはほとんど唯一の先蹤」といい、さらに、「普遍性をもつた意義の分布表を標準にして、各時代、各作品の語彙ごとにその意味の「野」における分布の状況をあきらかにする試みがなされなければならない。**それぞれの言語体系における、さういふ語彙の分布状況のちがひは、やがてその背景にある思考形態の相違を予想させるものであつて、…**」ということにも、同趣の考えを読みとることが出来ます。

そのためには、対象語彙の選定が先ず必要であります。それと同時に語彙分析の手段が無くてはなりません。この対象語彙選定と分析の両者について、比較語彙論は、その方法を提案しております。そして、選定された語彙を分析する方法が、「意味分野別構造分析法」(SAV)であります。

このように、比較語彙論は新しい研究方法による新しい学問分野であります。新しい事に関しては、当然ながら、「旧来の手法を守ろうとする人々・既存の世界からは無視され、敵視され、新世界においても、僅かな支援しか得られない」と、2002年名古屋大学国際フォーラムで、ミシガン大学名誉学長のデューダスタット氏が言われた通りだと思います。

5.3.1.2 用語「比較」

次ぎに、比較語彙論に対する直接的な批判について検討します。

第一に、「比較」ということについてであります。ご承知のように、言語学の中で、大きな成果を上げた「比較言語学」という部門がございます。そして、「比較」という用語は、こと、言語を対象とする学問では、そこで使われたように使わなければいけないという暗黙の約束があるようであります。このことについて、比較語彙論はその約束に従ってはいません。それで、「お前の言

う比較語彙論というのは、日本語を中心にするなら、同系の言語が見つかったというのでしょね」と、さも「物を知らぬ奴が…」という口吻の批判に接したものです。偉い先生からも、そういうのは「対照」というのだというご注意も受けました。中には、それを見越して、「比較」をそういう風に使ってもいいですねと言われる方もありました。中には、一々そんなことを断らなくても良いのだという御意見もありました。しかし、まずは、この「比較」を比較言語学の呪縛から解放し、学問の方法としての重要な一つとして、理解していただくことが大事だと思奮闘いたしました。その実、よく考えていくと、「比較語彙論＝語彙論」であり、わざわざ物議を醸すことはなかったのですが、停滞した語彙論の現状からは、多少インパクトのある名称の方がむしろ好ましいと思ひ、相変わらず、その後も比較語彙論を標榜しております。

比較言語学で同系言語に比較対象を限定するには訳があります。そうしなければ、比較自体が成立しないからであります。その比較の対象はご承知のように、「音韻」であります。系統の違う言語における「音韻比較」は面白いかも知れませんが、それだけで、特に意味を持ちません。日本語のナマエ *namae* と英語の *name*、インドネシア語の *nama* はよく似ていますが、偶然以上の物ではありません。これで、言語間の親疎などを論ずることは出来ません。それはよく分かります。音韻を対象にする以上「比較」は同系言語に限らざるを得ないのであります。だからと言って、「比較」などという極く普通の、然も、研究の基本になるような言葉を狭く限られてはたまりません。「学問の用語は定義に従って用いるのが当然で、やたらに変更するものではない」という批判もありました。これも事によりけりで、これを全て「対照」で済ますことが出来るでしょうか。比較言語学で言う方の「比較」を狭い意味での「比較」と限定すべきだと思います。

ところで、比較語彙論で比較するのは「意味」です。これは、同系言語に限りません。意味は、どの言語にも共通の、ほぼユニバーサルであると

考えて良いと思います。勿論、完全に一致するわけはありません。言語によって世界の切り取り方が違うのは当然で、それは、比較語彙論の恰好のテーマになることであります。

このことに対しても「意味がユニバーサルだという証明がありますか」という批判がありました。恐らく、そんな証明はないと思います。しかし、素朴に考えて、翻訳が可能であるということは間接的に証明になると思います。勿論、一对一の翻訳など不可能ですが、その違いはやはり、比較語彙論のテーマになるべきもので、比較を疎外するものではありません。全て証明済みでなければいけないというのは、何もやってはいけないと言うのと同じ事だと思います。

こんな事はわざわざ議論せずに、もう早くに世の中には「日英比較文法」などという講座が出ているくらいです。しかし、比較語彙論の根拠をしっかりさせるためにあえて、批判に答える形で述べました。猶、先ほど、「比較語彙論＝語彙論」であると申し上げましたが、これについては、次ぎに説明いたします。

5.3.1.3 他の語彙—語彙史記述の方法

比較語彙論の構想を提案したとき、念頭にあった比較対象は「他言語の語彙」でありました。しかし、「他言語の語彙」とは何かという質問を頂きました。考えていきますと、なかなかの難問でした。元々、比較語彙論は目的として、語彙の比較を通じて、その語彙に反映する「文化」の比較、そして理解ということを持っておりました。その原点に立ち返って考えてみれば、比較対象はその語彙の背後にある「文化」の相違ということを目指すべきいいということでもあります。相違する文化とは何か。そもそも文化とは何かと考えますと、生活を律する思想・信条をはじめ、風俗・習慣等、諸々であります。それで、そういう文化背景・思想背景を異にする語彙は全て比較対象になると考えるようになりました。極端なことを言えば、同一人の別の言語作品の語彙は既に思想背景を異にする語彙であり、比較対象になります。つまり、同じ語彙のコピー以外は全てが比較の対象になるということでもあります。「他言語の

「語彙」と言っていたのを「他の語彙」といい換えました。そうすることにより、同じ言語の歴史的研究に道が開けました。

従来も、「語彙史研究」ということは盛んに言われ、「国語語彙史研究会」という組織があり、『国語語彙史研究』という論文集が1980年来30冊以上刊行され、多くのすぐれた論文が収められております。それは貴重であります。その中に、本当に「語彙史」というのにふさわしいものは前田富祺氏の論文以外にはそんなに沢山はありません。語彙史の方法を正面から論じたものも見あたりません。多くが、「語誌」あるいは「語史」であります。これを幾ら積み重ねても「語彙史」には成りません。「語彙史」には「語彙史」の方法があり、私は、請われて「語彙史記述の方法論への提言—比較語彙論の方法による—」（佐藤喜代治編『国語論究』8 2000.11）という提案をいたしました。「語彙の体系」が良く分かっていない現状では、比較語彙論の提案する方法によって、対象語彙を選定して時代的に比較することが、語彙史記述のために適切な方法だと思っております。この、方法に従って語彙史研究に取り組んでいるのが、広瀬英史氏であります。

ただ、比較語彙論全体に通じる事ではあります。なんとと言っても、「意味分野」という粗いカテゴリーが基準になっております。これは、今後精選していく必要があり、最後には個々の語誌に到達できるものであります。ただ、最初から、特定の語の語誌を記述するのと、結果的に同じであっても、全体から見て、注目すべき言葉を見つけて記述するのと、はじめから特定の語を目当てにするのとでは、方法、目的が違っており、一方が一方を否定することには成りません。相携えるべき事であり、ここに、語彙論が、個々の語と、総体と両者を対象にしなければならないことが、明確になると思います。

比較語彙論が対象にするのは、「他の語彙」であり、同じ語彙でないものは皆対象語彙になります。こう考えてきますと、比較語彙論は語彙論そのものであり、当初他言語の語彙を比較対象として想定していたときの「比較」と学問の方法その

ものとしての「比較」というように、内容が変質していますが、前にも申しましたように、語彙論の現状から見て、「比較語彙論」を標榜しておきたいと思えます。

5.3.1.4 他言語との比較は成立しないという批判とコード付け

比較語彙論に対して、否定的な批判は内容不明な批判はともかくとして「他言語とは、元々システムが違うのであるからその語彙との比較は成立しない」、「そんなことは絵空事だ、早く止めなさい」ということでした。語彙研究者からの御批判でしたが、この忠告には従いませんでしたし、従わなくて良かったと思っております。私はやってみなければ分からないと思うとお答えして同一基準でコード付けをすることを工夫してみました。同一基準でコード付けが出来れば、比較は可能であります。ここでは、コード付けのことは割愛いたし、第五次まで進んできたコード付けの基準⁶⁾をご参照願うことに致しますが、やってやれないことはないであります。現にこれを使い、インドネシア語・韓国語・中国語・マレーシア語との比較が行われ、ここでは申しませんが、既に幾つかの成果を生みだしているのであります。

5.3.2 語彙論の対象—総体論と元素論

私は、語彙論も文法論・音韻論がそうであるように、その単位になるものとその全体に対する研究が必要だと思っております。ひとり語彙論だけが、古来、個々の語に対する研究は盛んでありましたが、全体、つまり、文字通りの語彙（語の集合）に対する研究は殆ど行われず、ために、語彙論といえば、個々の語の研究だと思っている人が現在でも数多くいる状態であります。これが、私が度々申している「語彙」を「単語」と同じように使うという用語の誤用にも繋がっているのだと思います。このことも、ここでは割愛いたしますが、語彙論を個々の語に対する研究部門の「語彙元素論」、全体に対する部門の「語彙総体論」と、この区別が無くなることを祈念しながら分けることを提案いたしました⁷⁾。単に語彙論といえば、ある人は個々の語に対する研究だと思ひ、一方では、総体に対するものだけをさすと考えられる人

がいる中では、無用の混乱を避けるために分けておく方が賢明だと考えたからであります。

しかし、これに対しては、名称のことはともかく（このことについても種々意見がありましたが一長一短であります）、その中間段階があるという意見が寄せられました。ある特定のグループの語彙に対する研究を言うのであります。ただ、この、元素論・総体論と分けるのは、意識の問題であります。ということは、語彙を総体として扱おうとするのか、個々の語を相手にするのかということであり、語彙の大きさは問題ではありません。語彙は、言うまでもありませんが、語の集合であり、集合の仕方は千差万別であります。語をその集合の「元」だとすれば（ということは、語の定義のこともあり、何を「元」にするかは、音韻の単位を音節とすることも単音とすることもするように、いろいろ考え方があります）、極端には、「元」のゼロの集合も有り得ますし、殆ど無限大ということもあります。従って、中間の段階を設定するというは不必要だということになります。

5.3.3 語彙の体系のこと

語彙の体系が音韻のように透明性のあるものならば、語彙研究も余程違っていたと思いますが、人間文化との接点ということもあり、世の移り変わりと密接に関係し、それ故、複雑で、曖昧で、いろいろ重なり合い、とても、一筋縄で解明できるような生やさしい物ではないようであります。以前、私は、これを「体系がない」として不用意な言い方をしておりましたが、言語において、「語彙」を他の領域から、つまり、音韻・文法などと区別して扱うことが出来ること自体そういう「語彙の体系」はあるのであると言われ、その通りと合点いたしました。つまり、語彙は、その体系内の組織が不透明で複雑で曖昧だということあります。また、意味の体系とは、別物であることについては度々申しております。『分類語彙表』を語彙の体系だと思っている人がいると聞きますが、これは意味の分類であり、仮に、ある種の「意味の体系」とは言えても、決して語彙の体系ではないということあります。その実、『分類

語彙表』は意味の体系でもないと思います。意味の体系についてどうこういうつもりも能力もありませんが語彙の体系は、当然ながら、語形と意味との対応関係が、上下だけでなく、横にも関係が有るべきものと思っております。このことは、ここで止めます。

5.3.4 異なり語という言い方について

私が国語学会（現日本語学会）で「異なり語と延べ語」と題して研究発表をしたとき（1995）、「異なり語」という言い方、「延べ語」という言い方は未だ使われたことのない用語だと複数の方から指摘を受けました。「異なり」「延べ」と言うべきだという注意であります。国立国語研究所ではそうだったのであります。しかし、語彙を対象にしているときですら、「延べ」は誤解を生じないものの、「異なり」は「一体なんですか」などと質問を受けます。「異なり語」と言えば誤解はありません。阪倉氏は1960年の論文で既に、「異なり語」と使っておられます。私は、阪倉氏が使っていないなくても、「異なり語」は必要な用語だと思います。「延べ語」はあまり必要ではありませんが、「異なり語」に合わせて「延べ語」と言っておこうと思います。

5.3.5 コード付けしたことが分析の結果に現れる

コード付けの詳細については、ここでは申しませんが、「コード付けをそのようにしたから、そういう分析結果が出たに過ぎない」という言い方をされたのを聞いたことがあります。私個人に向けられたものではありませんので、その時は答えませんでした。比較語彙論のコード付けに対して成されたものであることは明らかですので、それについても答えておきます。

私は、語彙論の対象について、こう考えます。音韻論や文法論・意味論の方が、適切に対処できる問題もあり、語彙論的には対処の難しいということは、当然ながらあります。しかし、語彙論の対象は言語の全ての領域にわたるものだと思っています。そして、語彙論が対象化できることは何かといえば、コード付けできるという事柄だと考えます。コード化するには、言語そのものに対して深く沈潜して理解を深める必要があります。そ

して、コード化できたことが（現在コード化できない種々の言語現象については度々言っていることですのでここでは触れません）、語彙論的分析の対象となり、分析の結果に現れるのであります。従って、先の意見は当然のことを当然のこととして言っているのであり、むしろ、知らず知らずに語彙論的分析結果についての正しい理解であり、コード付けを正当なものとして認めていることになるわけで、批判の積もりで言われたことが、却って、心強い意見であったと言えるものであります。

5.3.6 批判の必要性—有益な批判と無意味な批判

コード付けという事に関して、私は、『分類語彙表』を基準に使っております。もっとも適した基準が必要かも知れませんが、現在、他の方々も使っていることもあり、成果の比較にも、基準は同じ方がいいと思います。ただ、これは、比較語彙論のために作られたものではありませんから、当然改訂する必要もあります。そういうことは全て公開の上で行っておりますが、私が投稿した論文を査読した人が、「自分が使っているものを批判している」といって、これだけではないかも知れませんが、没にしました。あきれ果てました。自分の見識の無さを露呈しているとしか言いようがありません。批判のあるところに学問の発展があることは、本居宣長が既に喝破しているところです。そんなことの分からぬ人が良くもまあと思いますが、この論文は請われて、『文化言語学』という論文集に収められました。他にもそういうことがありました。未だ、分かっていただけなのは、私もいけないのかも知れませんが、私の言うことを、その方が理解できなかったに過ぎません。これも、他の全国紙に投稿したら直ぐ採用してくれました。こういうのは、無意味な批判です。批判なら何でも良いというわけにはいきません。比較語彙論は荒唐無稽だというような批判こそ荒唐無稽で、目先のことにのみとらわれている戯言に過ぎません。その訳の分からない評価を聞いて自らの判断にする情けない人もいますのです。罪作りの話ですが、そういうことが充満している世の中です。無意味な批判も、そういう考え

方をする人もいるということを知る上では、その限りでは有益なのかも知れません。

6. 語彙論の確立

まだまだあると思いますが、甚だ残念に思っていることとして、『言語学大辞典』に見られる語彙論の存立自体に対する疑念が有ります。これは無理解としか言いようがないもので、語彙論自体がそういう乱暴なことを言われぬように、言った人が恥ずかしくなるように、努力し、成果を上げるほか有りません（この辞典は項目執筆者の署名がありません。監修者の責任ということでしょうが、一々にはいかに有能な監修者として責任は持てまいと思います。現に、その監修者のお一人、千野栄一氏の発言とは明らかに異なっているように思います）。既に、比較語彙論の方法により、語彙論は確固とした地歩を築いたと思いますが、猶一層精進しなければならないと思います。

「わざわざ厄介な分析をしなくても分かることだ」というような批判については、もう何も言わなくてもいいと思います。そうではないことは事実が示しています。もちろん、そういうこともありましようが、比較語彙論の方法によって初めて明らかに出来たことも現にありましたし、薄々分かっているということも、客観的データを添えてしめすことが出来たことは大切だと思います。金田一春彦先生が集中講義において下さった折、学問とは厄介なことである、と仰有ったことを想起いたします。

何はともあれ、批判があつてこそ、学問は進展すると存じます。これからも、忌憚のない、そして、建設的な御批判を御願ひいたすものであります。

語彙論は意味分野別構造分析法を得ることによって、確実に独自の地歩を築きましたが、その基盤たる個々の語の分類、コード付け、コードを使つての分析方法の枠組み等について一言しておきます。

6.1 意味分野別構造分析法におけるコードの使い方

語彙分析に意味の観点を導入したのは前述しま

した阪倉篤義氏でした。初期の段階としては致し方ないとはいえ、誠に大まかなものでした。私達は、いやしくも意味を語彙分析の観点に据えるならば、分析において少しでも意味の欠落や無視は避けなければならないと考えました。その結果、語の構成要素毎に分解した意味単位にコードを与え、それに依っての分析を経て、各語に一語としての単語コードと、意味単位毎に与える語素コードを開発してきました。そして、そのコードの使い方として、種々試した後、意味を表すのは小数部分であることに鑑みて、整数部分を全て除去したうえで、単語コードと語素コードを比較して、同じであれば、語素コードの一つを削除した後、全てのコードを集めて、小数一桁による「大分野」、小数二桁による「中分野」、小数四桁による「小分野」という枠組みによって、その語彙の意味分野別構造を示すことにしました。コード付け以後は全て数字の操作になり、若干面倒なことはありますが、以前に行っていたよりはよほど簡素化しました。

このように示した、意味分野別構造表を比較することにより、それぞれの語彙の共通点、相違点、特徴などを知ることが出来るようになりました。此处では何も例示せずに申しましたのでご理解していただきにくかったかも知れません。別稿⁸⁾をご参照いただければ幸甚です。

おわりに

文字法師は、数えることに徹していこうと思います。ウォーキングの歩数も全部指折り数えていますし、文字法師は、自転車に乗ってもペダルを数えながらこいでおります。正に、半銭の分無しの世界です。

注

- 1) 日夜、文字を数え、「他の宝を数えて半銭の分無し」(「如何に況や権実の教法・顕密の聖教を悟得すと雖も此の身を執する之心を離れざるは、徒に他の宝を数へて自ら半銭之分無し(原文は漢文体)』『正法眼蔵随聞記 五-二』『只文言を伝て名字を誦ましめ、日夜他の宝を数へて自ら半銭の分無し。』『学道用心集 五 参禅学道は正師を求むべき事』)と言われるような、正に、算沙の輩であります(「算沙のともがら衣裏の宝珠をみるべからず』『正法眼蔵』『伝衣」)。
- 2) 両点本とは、江戸時代に盛んに刊行された物で、漢文法華經の右側に真誦(音誦)を多くは平仮名で、左側に訓点を付けて訓読できるように片仮名で記した物です。多数刊行されていましたが、刊記のある物はごく少数です。
- 3) この三月に公開される禅研究所紀要41号に「正法眼蔵漢語サ変動詞の意味分野別構造」と題する論考を投稿しております。
- 4) 浅見徹「古代の語彙Ⅱ」『講座国語史 3』1971
伊牟田経久「「かげろふ日記」の語彙の一考察」『広島女子短期大学紀要14集』1968
伊牟田経久「源氏物語名詞語彙の構造」『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』1969
- 5) 田島毓堂「比較語彙論への批判と対応」『名古屋大学文学部研究論集 文学49』2000
- 6) 田島毓堂「コード付けの基準—単語コードと語素コード・比較語彙論のために(その5)一」『名古屋大学文学部研究論集 文学47』2001
- 7) 田島毓堂「語彙論の課題—集团的規範と個別的実現一」『名古屋大学国語国文学 71』1992
- 8) 田島毓堂・広瀬英史「語素コードを利用した研究方法—単語コードと語素コード—」『語彙研究9号』2011
田島毓堂「意味分野別語彙構造分析法における意味コードの使用法及び分類枠組についての提案—単語コードと語素コードによる分析3(承前)一」『愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化 27』2012